むねの火は雪もてけちつことわうと、、とこまやかにかたりきかせむ

フィヒテ独逸國民に告ぐと日本國憲法の廢止

永雄策郎

一　独逸国民に告ぐの要領

独逸観念哲学の巨頭ヨハン・ゴツトリーブ・フイヒテがナポレオン軍の独逸を蹂躙せる時にあたり、その陣鼓のとどろくところ、その行進を窓外にながめつゝ、一八〇七年十二月十三日よりあくる一八〇八年三月二十日に至るまで毎日曜正午より午後一時まで十四回、ベルリン学士院に於いて「独逸国民に告ぐ」と云ふ獅子吼をなし仇敵を前にして毫末だも所信をまげず、当時の亡国独逸国民の肺腑をえぐつて感銘をあたへたことは、今も独逸人に語りつがれて居り、日本の教養階級にも知られて居る。この講演が一九一八年第一次世界大戦による独逸敗戦まで、隆々たりし独逸の興隆の精神的指導に重大なる

役割を演じたことは、多くの識者によって是認せられるところであるが、今日でも西独逸の驚異にあたひする経済的復興の根柢をなし、フイヒテの復活が叫ばれて居ると伝へられる。されば私は、この書の内容を、一刻も速かに、独逸とほゞ同様の運命に沈淪せるわが日本の同胞諸君に知らせたい。日本再建の有力なる他山の石たらしめたい。と云ふ情熱より、魯鈍に鞭うつてこれを訳註し昨昭和二十八年五月法政大学出版局より公刊したのである。この書の目標とするところは、結局独逸人教育のやりなほしによる独逸人そのものの再建であり、焦眉当面の急務としては独逸人を啓蒙結束してナポレオン軍を撃壊せんとするのであるが、その論理展開に指揮棒的役割をはたせるものは、言語哲学論である。私はこのフイヒテの言語哲学論は、少くもその基礎観念に於て動かすべからざる真理であると思ふが、果して然りとすれば、現行日本国憲法は即刻廃止せられねばならぬ。存在せしめてはならぬ。この憲法の存続する限り、日本の独立はあり得ない。日本は米国の属領にすぎない、と云ふことになるので、ここにこの小論を起稿し、識者諸彦に訴えんと欲するのである。

併しこの書の指揮棒となつて居るものが、言語哲学論であると云ふことを知る為には、まづその内容が明らかにせられねばならない。そこで私はこの書の要領を私の脳裏にうつつたまゝに、必ずしもこの書の順序に従はずに記述して見たいと思ふ。

(1) フイヒテは開口一番独逸を亡したものは、独逸人の利己心であると喝破し、それから独逸人をかくも利己心的に育成したるものは、独逸の旧教育である。旧教育は「教育は学童に対して正しきことを示し、これを忠実に守るように訓戒するものであるのに、これ以上のことをどうして教育に期待し得ようや、学童がこの訓戒に従ふか否かは、学童自身のことである。学童が、訓戒せられたことを実行しないとすれば、それは学童自身の責任である。学童は、教育によってうばはれ得ざる自由意志

を持てよ」（小訳三〇頁）と云って自由意志即ち「低級なる意味の自由意志」即ち意志の「多数の同時的可能性の間に於ける不定の動揺」（小訳一五八頁）を容認した。これでは教育がたよりとしたのは、学童の天賦の才能と偶然とであり、教育なきも同様である。人間一般に「時間的に最初に展開せられる意識の種類は漠然たる感情（dumkles Gefühl）のそれであり」「漠然たる感情は、先づ、生きたい健康でありたいと云ふやうなものとしてのみ、この自我を示す」（小訳六二頁）のであるから、独逸人の利己心は、有名無実の旧教育の結果であると云ってよい。

(2) そこでフイヒテの主張する新教育は、旧教育の意志の自由を全然否定し、これと逆に決定の冷厳なる必然性と、その反対の不可能とを意志に導入するものであり」（小訳三一頁）「高級なる意味の自由意志」即ち「端的に自力によって存在し、そのあるが如くに存在する第一次的として現象する意志決定」（小訳一五八頁）をなすことを、「限定的の常時即応的の意慾」とする如き意志の人、即ち有事には知識がそれ自身不変的の生命（in sich selbstbes Ständiges Leben）である」（小訳一〇四頁）如き人、換言すれば知識が神にまで高められる如き知行合一的の人、即ち八神の技を演ずる人を打出せんと慾する。

(3) 尤も知行合一と云ひ、八神の技と云ふは、「本質そのものが、意志決定の現象のなかにいり込んで居る場合である」（小訳一六二頁）が本質即ち神は、演技を通じて可視となるのであって、演技そのものは、本質の影である。モナリザをえがくダヴインチの意志決定に、本質がいりこんで居ることは、モナリザを見ればわかる。併しモナリザは本質の影であり、永遠無限に未完成である。これは本質が人間によってけがされて居るからである。かくて本質は無限の価値を有するが「真の実在とせられない」（小訳一六九頁）と云ふ意味に於いて無であり、本質から見れば凡ゆる有限は、歯牙にかけるに足らぬと云ふ意味に於いて「無

価値」と云ふ無である。これをフイヒテは「象徴世界の無限性のなかに於いて、それからそれと可視となる凡てのものは全く無の無であり、影の影である」（小訳一六九頁）と云ふ。この論法によれば、羅馬人の世界支配に勇敢にも立ちむかつた古のゲルマン人も、宗教改革のルーテルも、独逸哲学の始祖ライプニッツも、中世の独逸諸都市の偉業も、新教育の方法を発明したるペスタロッチも、凡て無価値であり影であるが、誇るべき独逸人の八神の技である：八神の技にあらざるものは、八神の技の偽者乃至そのまた偽者にすぎないから、無の無であり、影の影である。これを要するに、フイヒテの宗教観は、絶対を前提として相対を認むるにより、ものの真価を明らかにせんとする厳実哲学となり、（小訳七一頁）また永遠無限に未完成のモナリザを完成せんとする生成発展の努力論（小訳一六七頁）ともなる。

(4) フイヒテが目標とする理想の人は、有事に際して知識が神にまで高められる如き知行合一的の人、即ち八神の技を演ずる人であるか、かくの如き人の日常生活は、「純意義的」にして「真の宗教的」であらねばならない（小訳五七頁）と云ふのは、八神の技は、時ありてか爆発するが平素は消えて居る火山の噴火のやうなものであると云ふ意味であらう。フイヒテによれば、かやうな「純意義的」にして「真の宗教的」の人物は、ペスタロッチの感覚及び直観の教育によつて養成せられる。ペスタロッチの教育方法が、フイヒテの云ふ新教育技術であり、ペスタロッチの直観の教育が、フイヒテの云ふ精神的自主活動（geistige Selbständigkeit）の教育にあたる（小訳三七頁及び二一一頁）かく如き新教育をうけたる人間、即ち自然のまゝにあらざる人間にしてはじめて、「漠然たる感情」の意識にあらざる「明晰なる認識」（klare Erkenntnis）（小訳六三頁）の意識が展開し、八神の技を演じ、無限進及の努力をなす。フイヒテは新教育技術によつて、天賦の才能にめぐまれざる学童をも、天賦の才能にめぐまれたる

学童の如くに立派な人間に創造せんと慾する。否人間いやしくも精神的自主活動だにうごけば、皆天才となると云ふのであつて、フイヒテは教育万能論者である。

(5) 以上記述したところを、一言以つてこれを掩へば、一般人間教育論であるが、フイヒテの講演の目的は、決してさやうなところにあるのではない。目的は結局人間教育のうちの独逸人教育であり、独逸の再建であり、当面の急務としては、ナポレオン軍の撃攘である。さうだとするとなにはさて措き、独逸人とは何物であるかと云ふことが、明らかにせられねばならぬのであるが、フイヒテによれば、独逸人とは生成発展する独逸語と云ふ言語をかたるものであり、これが他のゲルマン諸民族との唯一の差別点である。然るに「国語が人間によつて形成せられると云ふよりも、むしろ人間が国語によつて形成せられると云ふを、遙かに適当とする」(小訳七九頁)。これが言語の本質であるから、独逸語の如きよどみなく生成発展する言語にして初めて無限追及的の努力をなし得るので、哲学即ち独逸語では「自由なるかつ自主活動的の思惟」(Das freie und selbsttätige Denken)(小訳一三四頁)も詩も興隆する。フイヒテの云ふ新教育も実施し得る。高級なる意味の自由人も創作し得る。高級なる意味の民族も結成し得ることになる。然るに生成発展せざる言語、即ちよどむ言語かたる他のゲルマン民族に於いては、行動常にゆきづまりで無限的努力などあり得ず、悟性は共通に結合せられないから、哲学も詩も興隆せず、民族的結成もなし得ない(小訳第五講)。ナポレオンの如き小人物が出るのも尤もである(小訳一六九頁)と云ふことになる。

(6) それからなほ「国語が人間によつて形成せられるというよりも むしろ人間が国語によつて形成せられるといふを、遙かに適当とする」と云ふことは、ある特定国民は、その特定の国語にあらざる国語によつては形成せられざるものであると云ふことであり、ある特定国民の存在は、ある特

定の国語の流れの存在を意味し、如何なる人間と雖、その国語の流れに湧きいでたる一浮塵の如きものであり、その他よりは湧き出で能はざるものであると云ふことになる。さうだとすると凡そ高尚なる心情を以て思惟するものであるなら、自己の生命の永遠の発展を保証し得る対象は、自れが生れいで、育成せられ、成長したる民族以外にはあり得ない。ここに祖国愛（Vaterlandsliebe）が発生する（小訳一七七頁）。国民には有事に際して不惜身命の祖国愛教育が施されねばならぬのであり祖国愛が「何はさて措き絶対最高の窮極の独立の機関として、国家自体を支配せねばならぬ」（小訳一八四頁）即ち祖国愛が「独逸国の楫（Ruder deo deutschen Staats）の座につくか、或はそれともその影響力がそこまで至り得るか」（小訳二〇三頁）であらねばならぬことになる。それから祖国のために身命を惜しまず死して天国に行くと云ふことは、祖国愛の対象たる自国をまづ天国とすることによって、世界を天国化することであり（小訳一八九頁）、眼に見えるこの世こそ天国のはじまりである（小訳一七六頁）。そこで独逸人は独逸天国化の仇敵にして小人物なるナポレオンの軍隊に対して結束して立ち、これを撃壊しなければならない。

これを要するにフィヒテは、十四回の講演のうち、第四講と第三講の二回を、直接言語哲学論にあて、言語の本質、言語と民族との関係、独逸語の意義を明かにし、講演の至るところに於いて、これを実証して居る。私が、フィヒテ「独逸国民に告ぐ」に指揮棒をなせるものは、言語哲学論であると云ふわけは、こゝに存して居るのである。

二　フィヒテとナポレオン

併し私は、フィヒテの言語哲学論の紹介にいるにさきんじて、そのナポレオン観とナポレオンに対する態度とについて一言せざるを得ない。蓋しわが国に於いて、これ等につきやゝともすれば誤解をまねく恐れがある。否フィヒテのナポレオンに対する態度の如きには、非常な謬妄が流布せら

れて居り、この講演の目的とするところすら、正解せられて居ないではないかと思はれぬでもないからである。一体フイヒテはほめるにしてもくさすにしても、個人名を掲げることは、殆どない。個人名を掲げて居るのは、ルーテルとライプニッツとペスタロッチと、この三名だけであり、それも独逸のほこりとしてほめて居る場合である。無論、窓外にナポレオン軍の行進をながめつゝ、ナポレオンも聞けよと云ふ講演をして居るのであるから、ナポレオンと明示してそれを攻撃する筈はないのであるが、それでも到るところに於いて、何人にもナポレオンを指して居るととれる論法で、ナポレオンを小人物であり、残虐無茲悲の征服者であると罵倒して居る。私はまづこの点について、考慮して見たい。云ふまでもなく、ナポレオンは人間である。人間である以上、寸点毫末だも善いことをしないものなどあり得ない。たとひ少々でも善いことをして居るにきまつて居る。それにも拘らず頑脳明晰なるフイヒテが、これを小人物であり、残虐無茲悲の征服者であると云つて居るのは、ナポレオンの正体即ち本質について云つて居るのである。征服せられて居る独逸人としては、尤も至極であるが、それはきまつたことであるのに何とてさやうなことをことごとしく論ずるのかと云ふ人があるかも知れない。併しそれなれば現在の日本の思潮はどうであらう。広島・長崎で原子爆弾を投げて、一瞬にして五十万の無辜の生霊を犠牲にして置きながら、日本人を文明に反する罪に問ひ東京裁判にかけたマックアーサー、英国と共に自国が腰おしして日本をして露西亜と戦はしめたのであるのに、当時の敵国露西亜と一緒になつてかつての日本の責任を問ひ、日本を東京裁判にかけたマックアーサー、名を日本の民主化にかりて数十万の日本の有識者を追放するとともに、日本を脅迫して日本国憲法をおしつけたマックアーサーを、悪いこともしたが善いこともしたと云つて、無益の分析を敢てし、その正体乃至本質を明かにして居ないではないか。私には、日

本人のかくの如き分析沙汰が、亡国的の頭脳明晰と思へてならない。

但しナポレオンを小人物であり、狡猾無慈悲の征服者であると云ふのは、現にその跡蹤の下にある独逸人たるフィヒテとして、尤であると云ふだけのことで、ナポレオンを生んだ仏蘭西乃至第三者たる私どもより見ればさうではない。スイレーの名著「英国膨脹史論」によれば、第十八世紀は英仏戦争時代である。一六七四年に英蘭戦争が終つて間もなき一六八九年より、一八一五年のウオターローの戦争に至るまでの百二十六年間に七度通計六十四年、英仏は世界の至るところに於いて、血の雨を降らして戦つたのであるが、七度のうちの第四回目にあたる一七五六年より一七六三年に至る所謂七年戦争の結果、仏蘭西は加奈陀をうしない、印度に於いても没落してしまつた。その以後の英仏世界戦争は、凡て仏蘭西の英国相手の復讐戦争乃至喪失権益回復の為の戦争であるが、ナポレオンこそこの戦争の最後に出でた仏蘭西の英雄であり、愛国者である。さればこそナポレオンは既に一七九八年埃及に遠征して、スエズ地帯を占領し、英国の印度航路の要衝を支配せんと企図したのであるが、こと志とことなり、ナイル河口に於いて、その海軍はネルソルの為に敗れた。然るにナポレオンの海軍は、一八〇五年またまたネルソンの為に、トラファルガーに於いて敗れた。ナポレオンは英国との海戦に於いて、かくも敗退したのであるから大陸諸国を連ねて、これを英国植民地に対して封鎖し、英国植民地の産物を購買せしめざるの策をとつた。これが有名なるナポレオンの大陸封鎖であるが、大陸諸国はナポレオンの意の如くにならない。こゝにナポレオンの大陸席捲戦争が行はれたと云ふのが、ことの真相である。されば独逸と立ち場を同くする英国の文豪カーライルの如きも、その名著「英雄崇拝論」に於いて、ナポレオンを自国のクロムウエルと比較して、あし様にこなしつけて居る。これも英国人としてあるひは尤とも云へよう。併し先達てもラヂオを聞いて居ると、あ

る日本の正史学者は、ナポレオンを単なる征服者であると云つて居つたが、私には英米の宣伝ここに至り、日本学者の不見識ここに至るかと、長大息を禁じ得なかつたのである。

それからなほ日本に於いては、ナポレオンに対するフイヒテの態度乃至フイヒテの戦争観について、大変な謬妄が流布せられて居る。これは日本一の学者であると云ふ金看板をかけて居る先生がその「平和国家論」に於いて、さかんにフイヒテの「独逸国民に告ぐ」をかつぎ出し「フイヒテは敗戦後のドイツ国民に新しい教育を与へる為めにはドイツ民族の正史を新しく学び直さなければならない、と云ふことを申しました。そして彼自身さういふ眼でルツターの宗教改革の意義を回顧し検討したのでありますが、私共も今日本の正史を正しく学び直す必要があります。平和国家の信念と生活が日本人の伝統と正史の中に見出されるや否や。それは必ず見出されると私は思ふのであります」と云ひ、更らに「それから平和は決して柔弱な無気力な消極的なものでなくて、平和こそ勇しいもの、生産的なもの厳粛なものである。ミルトンの言葉を用ふれば「うち勝ちがたき典雅」であつてサタンも之を見てはたじろぐものである。この二つの事を天照大御神の神話が我々に教へてゐる。フイヒテは武器による戦ひには敗れたれども徳による戦ひを以て云々と言ひました」と云つて、先生の無抵抗的機械的形式的平和論の主張に援用して居るにいでて居る。併しこれは、フイヒテの云ふところ思ふところと、全然違つて居る。

なるほどフイヒテは「武器を持つての戦ひは終つた。これから原理、道義、国民性の新しき戦ひが起る。それを吾々は欲して居る」（小訳三〇一頁）と云つて居る。併し再び武器を持たぬなどとは決して云つて居ない。否フイヒテは「たとへクリスト教が、当初より、而も現状を顧みることなく国家及び国民と云ふ如き関心事より手を引くことを以て真の宗教的心情として推奨せんと志しても、それは、就中非常に屢々クリスト教によつて犯されたる甚しき宗教の逆用である」。「暴君にとりて

は、宗教的隨順を説法し、また彼が地上に於いて安住の地をあたへることを欲せざる者どもを、天国に追ひやることは都合のよいことである。併し吾々は、他人を天国に追ひやつてまで、この累若の推奨する宗教観を、わがものとしてはならぬ」（小訳七五―六頁）と云ひ、更らに「苟くも人生に対する上述の如き高級なる要求と、これを以て神聖なる権利とする感情とを、なほ生き生きと力強くいだいて居るものは、クリスト教の初期に「我爾曹に告げん。悪に敵することなかれ、人汝の右の頬を打たば、亦ほかの頬をも転じてこれに向けよ。爾を訟へて裏衣を取らんとする者には、外衣をも亦とらせよ」と云はれたる人々まで引き戻されては心から憤懣を感ずることであろう。「外衣をも亦とらせよ」と云ふのは尤もである。なぜかなら、彼がなほ爾の着て居る外衣を見る間は、これをも亦奪はんが為に、彼は爾に闘争をいどむが、爾が全然裸になつて始めて彼の注目をのがれ、彼の前に於いて晏如たることを得るからである。併しそれでは自己を尊からしめる高き心情が却つてこの世を地獄となし、厭ふべきものとすることになる。人は生れぬ方がよかつたと思ふことになり、彼は一日もはやく眼をとぢ、かゝる状態を見ないでもよくなることを願し、墓場に至るまで、益きざる悲しみが、彼の生涯つきまとふことになる」（小訳一九九頁）とまでに極論し、「吾々の最も古き共同の祖先、即ち羅馬人からゲルマン人と呼ばれたる新文化の基幹民族たる独逸人は、羅馬人の罰せきたる世界支配に、勇敢に立ちむかつたのである」そのわけは「独逸人たるものは何人と雖も奴隷となるよりも寧ろ死せんとすること、真の独逸人たるものはまさしく独逸人であり、また独逸人として生き続ける為に、その子孫をも独逸人に育成する為にただ生きんとすることを、彼等が前提としたことは自明のことである」（小訳一九一頁）と云つて、講演の至るところに於いて、ゲルマン人の実戦に於ける勇敢をたたへて誇りとして居る。フイヒテの云はんとするところは、

いまや武器を持っての戦ひは一応終つたが、これからまた原理、道義、国民性の戦ひが起る。その為に独逸人は改めて再び武器を以て立たねばならぬこと、恰も日本人が東洋平和の為に日清、日露の戦争を敢てしたと同様であることを意味したにきまつて居る。さればこそこの講演は独逸人を啓蒙結束してナポレオン軍を撃壊する為になされたのであり、フイヒテは幾度か従軍せんことをすら欲し、それが容れられなかつたから、夫人を傷病兵の看護に従事せしめ、夫人がまづチブスにかかり、それが感染して、一八一四年一月二十九日不帰の客となつたのである。無抵抗的機械的形式的平和論などに援用せらるるに、フイヒテこそ迷惑至極であらう。

三　独逸人の意義と独逸語

これからフイヒテの言語哲学論の説明にいる順序となつたが、その要領の要領は既に述べた。それ故にこの要領の要領に説明を加へて、フイヒテの言語哲学論は、少くともその基礎観念に於いて絶対的真理なることを明かにし、はたして然りとすれば現行日本国憲法は即刻廃止せられねばならぬ。一日も存在せしめてはならないと云ふことが、呑みこめるやうにせらるればよいのであるが、ここでも日本一の学者先生は、根本的の誤謬をつたへて居る。先生はフイヒテが「ドイツ民族の民族としての優秀さはその本原的な点にある。即ち混血が少く、血液の純粋な点にあることを述べて居ります。それと共にドイツ語の言語としての純粋さ、それは固有であり本原的であつて、外国の言葉が混同して出来たものでない。即ち血液の純粋と言語の純粋との上にドイツ民族の本原性、純粋性を高調したのであります。之が彼へフイヒテの有つた国民的自信の一つの根拠であります」と云つて居るが、これは全然うそである。フイヒテは「独逸人が基幹民族の原住所に止まつて居るのに対し、他の諸国民が他の場所へ移住して居る」と云ふ居住地の変化は「全く重要なことではな

い」と云ひ、(2)「それから諸征服地域に於いて、ゲルマン民族が原住民と混血した事情にも、あまり重きを置く必要はない。」混血は「本国に於いても スラヴ人との間に、相当広範囲に於いて行はれて居る。そこで今日いづれのゲルマン民族に於いても、自己の種族が、他の種族よりもより以上に純粋であることを、容易にほこり得ないのである」（小訳七八頁）と云つて居るのであつて、先生の所謂血液の純粋など、主張するどころか却つて否定して居る。かく血液の純粋を否定したうへで、フイヒテは(3)「独逸人とゲルマン系の他国民との完全なる対照の基礎となるものは」、「国語の変化である」。独逸人に於いては、その「原国語が中断することなく継続して語られて居る」。即ちゲルマン民族の分裂より今日に至るまで、「独逸人は、その自然力より最初に逆出したものの如くに生き生きとした国語を語すのに、他のゲルマン民族は、うはべだけは躍動して居ても、根柢に於いて死せる国語を語る」（小訳九五頁）。これが独逸人と、他のゲルマン系諸国民との差異であり、独逸人とは独逸語をかたるものであるとは、かう云ふ意味であることを主張して居るのである。それを先生の如くに「血液の純粋と言語の純粋」と両方ともの純粋を主張して居ると、両道を云はれては、それが軍に両道であるのみならず、肝腎かなめの「言語の純粋」だけを主張する主張の重力がうすらぐ。先生が「独逸国民に告ぐ」について云はれることは、徹頭徹尾あやまりである。

フイヒテはこれほど、独逸人が独逸語と云ふ言語をかたることに重きを置いて居るのであるが、フイヒテによれば「言語一般、特に発生器官の発音により言語に諸対象を表示することは、決して恣意的決定乃至約束によつて出来るものではない。それにはなにはさて措き根本原則がある」。即ち「本来、人間が語るのではなくて、人間に於いては人間の素質（Menschliche Natur）が語るのである。だから素質を同様にする他人に、意味が

通ずるのである」。然ればある言語の発音は、「特定の発音となり、決して他の発音とならぬのである。これは恰も諸対象が、各個人の感官に、その特定の形状色彩等を以てうつると同じく、これ等の諸対象が、社交的道具に即ち言語に、特定の発音をもってうつされるのである」。親の声が子の声と似かよひ、それぞれの土音があり、中年もの方が何十年外国に居ても、外国音を発音し得ないことが、これで理解出来る。それからまた「言語は言語として、如何なる時代にも、如何なる場所にも、端的に人間に対して、単一の形に於いてあらはれずして、到るところでその気候風土」即ち環境「並びに使用の頻度が発生器官に影響を及ぼし、観察表示せられた諸対象の排列が、その表示の排列に影響を及ぼし、これによって更に変化せしめられ、また発達せしめられたのである」が「この場合にも恣意とか偶然とかではなく、厳粛なる法則が行はれるのである」（小訳八〇頁）。かくて欧米語、支那語、日本語等の各国語があり、日本語と欧米語及び支那語とは、根本的に表示の排列をことにして居るが、同じく欧米語であっても、独・仏・英の如く国をことにするにより、表示の排列に相当の差異の存する所以と、その各国語に古代語・現代語・土語の存する所以とがわかる。

ところでかくの如き言語には、凡て見方によって、直接感性的知覚の世界即ち単なる五官による知覚の世界の対象を云ひ現はす方面と、超感性的世界即ち精神的世界の対象を云ひ現はす方面とがあり、両世界の「真の交流点」となって居る（小訳九五頁）が、感性的方面が「人間の言語の始りである」（小訳八二頁）。元始時代には、言語は感性的意義のみを現はすが、世の進化とともに、常に感性的意義を基本として、超感性的方面が表面する。例を日本語によると、木とか、石とか、夢に見た人とか、音とかを、たゞにその然らざるものと対立して存在するものだけと見或は聞く時には、それは感性的意義のみである。これが言語

の始りであるが、これ等を住みかを建てる材料の木とか、坦蕩々たる相貌をそなへたる聖人の周公とか、妙えなる響きとかと見或は聞く時には超感性的であるが、只今の例示の如く「ある特別の超感性的なるものは、ある特別の感性的なるものと対置せられ、この対置によって超感性的なるものの位置」即ち「ある特別の超感性的なるもの」が、然らざるものと対立することによって存在するその存在が明かとなり、それが「言語によって表示せられることになる」（小訳八二頁）。これを日本の歌壇でこの頃流行する言葉で云ふと、実相嵌入である。実相を見きはめて初めて秀歌はできる。現実に即してこそまことの意見は立つ。それが言語によって表示せられることになるのであるから、超感性的なるものは、所謂「漠然たる感情」によってではなく、「明瞭なる認識」によってのみ、換言すれば悟性の明瞭による理性の展開によってのみ把握せられるものであり、「超感性的なるものの凡ての表示は、表示する人の感性的認識の範囲と明瞭さとに照応する」（小訳八四頁）と云ひ得る。かくてこの個人的の超感性的なるものの表示は、民族の言語即ち素質を同じくするものの言語のなかに收められ、その民族の直観環境が成立する。そこで一民族内に於ける超感性的なるものは、その民族に直接明瞭であり、何人にも理解せられ、決して停止せず絶えざる流れとなる」（小訳八五頁）のであって、「言語はその通用環境に於いて」即ちそれぞれの国語をかたる民族の直観的限界内に於いて、「この言語をかたる人人の全部を、唯一の共通の悟性に結合するものである」（小訳九五頁）と云ふことが理解出来る。

これが生成発展する言語であるが、独逸人はかくの如き言語即ち独逸語を語り、独逸語によって共通の悟性に結合せられて居る。独逸語によって共通の悟性に結合せられて居ると、云ふことは、外国語によって共通の悟性に結合せられて居るのではないと云ふことであり、外国語は独逸人にわからぬものであり、わかる筈ないものである

。外国語がわかると云ふことは、最密なる意味では、実は外国語の影をにぎつて居るにすぎないと云ふことになるが、このことは言語の感性的及び超感性的意義につき更に精密なる考察を必要とする。

四、外国語とその感性的及び超感性的意義

さてフイヒテは、独逸人が外国語を学ぶ場合に、その感性的部分は「その言葉が恰かも恣意的である如くに学ぶ」（小訳八七頁）。即ち言語が恰かも故意に出来たものであるが如くに学べば、学び得る。併し超感性的部分について「せいぜいなし能ふことは、象徴とそれの精神的意義とを明らかにするくらいのことであり、」、これによって他国文化の皮相の生命なき正史を知り得るにとゞまる」（小訳八八頁）。即ち努力してもやつとわかるのは、その形式的の意味乃至影にすぎないと云つて、その例として独逸で使用せられて居る仏蘭西語のフマニテート（humanität）ポプラリテート（popularität）リベラリテート（liberalität）の三つの言葉をあげ、独逸人にわからない理由を詳説して居るが、ここにこの説明を紹介しては、手間がかゝりわづらはしい。私がフイヒテの言語哲学を説いて居るのは、どこまでもそれが日本国憲法の発止に重大なる関係を有するためであるから、私はいま外国語は、特にその超感性的部分に於いて、到底わかるものでない。と云ふことを、なるべく憲法問題と関係の範囲に於いて、日本に流行して居る英米語より、明かにしたいと思ふ。

そこでまづここに英語のパイン（pine）とか、クリプトメリア（Cryptomeria）とか、ベル（Bell）とか云ふ言語があると、吾々日本人はその感性的意味を松、杉、鐘と飜訳する。松も杉も、日本の松杉であり、鐘は陰にこもつて響く梵鐘と解せらるゝが普通であろう。そしてそれでよいとして居るが、実はパインとかクリプトメリアとかは米松米杉である。日本の松杉ではない。ベルは陰にこもうずして陽にひゞく、口のひらいた鐘

である。梵鐘とはちがふ。併しかくの如き感性的の意味は、特殊注意を払へばわからぬでもない。けれども吾々は、さやうな注意を一々払つて居れるものでないから、無意識の場合即ち日本人的自然の恣意的でないときには、忽ちにして日本の松・杉・梵鐘とあたらずと雖も遠からざる理解をして平気で居る。

然らば次ぎに英米語の超感性的の意味の方はどうであらうか。

(1) 英語のファザー(Father)、マザー(Mother)は日本語の父母であり、ファザー・マザーは日本の誰でも知つて居り、わかつて居ると信じて居る。その感性的意味はうみの親と云ふ意味であるが、この意味では、欧米も日本もその他どこの国でもかはりない。併しそだての親と云ふ超感性的意味に至つては、日本と欧米とでは全くちがふ。日本人には絶対にわかつて居ない。欧米のファザー・マザーは子供の見て居るまえで抱き合ひキッスする。それはとても日本の父母にあり得ないことである。日本の父母が子供の見て居るまへで、抱きあひキッスすれば、醜陋眼を掩はしめる。併し欧米ではそれが日常のことである。けれども私はこれを非難しようとは思はない。これは欧米人と日本人とで、ものの脳裏にうつり方と、それに対する対応の仕方、即ちものの考へ方が、そもそも出発点から違つて居るからのことで、彼等には彼等の境涯がある。それが子供の見て居る前でも抱きあひキッスすると云ふ行為になつてあらはれたとすると、父母対子供の精神関係がまた欧米と日本とでは違ふはずであり、日本人にはとても想像し得ざるものである。日本の家庭でパパとかママとか云ふ言語を使用して居るものがあつても、それは形のうへだけのことで、実際は日本のちちはハを意味して居るにすぎない。序に云ふが日本人にファザー・マザーがわからないやうに、欧米人にも日本の父母はわからない。日本の母は太閤記十段目の母の「さつき」のやうなものであつて、子供の光秀にむかつて「主を殺した天罰」の恐る

べきことを枸々として説ききかせるものである。息子は「まだ祝言のさがづきをせぬが、たがひの身のしあはせ」と云ひ、「それや聞ませぬ」と袖にすがりつく初菊をふりきり、「風がもてくる陣大鼓、ゆき方見えずなりにけり」の「十次郎さん」の如きものであろう。それから父も、桜井駅で七生報国の「忠義の道」を子の正行にきかせる正成の如きものと思へばよい。かくて父も母も子も嫁も、日本のそれ等は欧米のとはちがふ。純個人的の抱き合ひなめりあひでなくて、義理人情のからみあひである。かくて家と云ふ観念を初め、凡ゆる道義観が相互に懸絶して居るのであるが、彼此対立して居り優劣は決定し得るものでない。

(2) デモクラシー(Democracy)と云ふ言葉は、民主主義と翻訳せられて居ると云ふよりは、寧ろそのまゝデモクラシーで一般に通用して居るが、これくらゐ日本で要領を得ぬ言葉はない。ついこの間まで英国がデモクラシーの故郷のやうに云はれて居たが、戦争以後は米国が本家本元でデモクラシーは米国流でなければならぬと云はれて居る。そこで大槻文彦博士の大言海を引いて見ると、デモクラシーとは「古への所謂下剋上と云ふものか」とあるのには驚いた。これは博士にも要領を得ないので、やむなく希臘語の語源を直訳せられたのであろう。

米国人はデモクラシーを「民衆の政治、民衆の為の政治、民衆による政治」と解し、これを米国の誇りとして居る。併し米国人口の二割を占めて居ると云はれるネグロは、シカゴやニューヨークなどでは特別の区劃にすまはせられて居る。南方では電車も公園も白人とは別である。選挙の時に投票場に近づくと、棍棒で追ぱらはれて居る。アフリカのリベリアは自覚したネグロが作つて居る独立国だなどと云はれるが、実は米国政府がもち扱ひに困つて、体裁よくネグロを国外に追つぱらつたにすぎない。この点だけに見ても、米国のデモクラシーは、わけのわからぬものである。

これとくらべると英国のデモクラシーは、流石

に筋が通つて居る国歌は

God save our gracious King, long live
our noble King, God save the King.
Send him victorious, Happy and glorious,
long to reign over us,
God save the King!

神よ吾等の仁慈なる王にはえあれ　吾等の尊厳な王よいのちながかれ、神よ王にはえあれ。
神よ吾等の王を戰勝者にして幸福なる光栄者たらしめ給へ、いく久しく吾等を統治せしめ給へ。
神よ王にはえあれ。

と云ふのであつて、「吾等の仁慈なる」「尊厳なる王よいのちながかれ」と云ひ、「吾等の王を戰勝者にして幸福なる光栄者たらしめ給え、いく久しく吾等を統治せしめ給へ」と歌ひ、その為にいのちはさしだすと云ふ意味であるから、日本の君が代と毎行かばみづく屍と合せたやうな感をあたへるが、現在は女王で、昨年戴冠式には、老首相チャーチルが国民の先導に立ち女王に忠誠を誓つて居る。無論憲法学者の通説によれば、主権在君であり、「民家の政治」ではなくて、統して治せざる王の政治である。そこで深く考へない人は、治せないやうな王はいらない。廃止してしまへと云ふかも知れぬが、それでは成人した子供に家業をまかせた親がにらみをきかせて居るのを、無用であり、姥捨山にすててしまへと云ふと同一の論法になる。それからまた個人の尊厳の観念によつて、白人にしか通用しないものであつても兎に角米国的デモクラシーに限ると云ふものもあるが、それがまた間違つて居る。社会制度は人文発展の為に存する。人文を発展せしめて個人の尊厳を保持する為の社会制度は、原則として人を平等に取扱ひ、各個人に責任を持たしめねばならぬが、現実の各個人には、能力にも人格にも差異がある。現に日本でも文化勲章など認めて居る。社会制度が個人のわがまゝ育成の為でないなら、時あつてか、形式的多数決を無視せねばならぬこともある。そこで英国流の主権在君のデモクラシーに意義が発生

する。それでは悪なる王が出たらどうなるかと云はれるか知れぬが、それは王の人格問題である。これを要するに英国的デモクラシー即ち立憲君主政治と、米国的デモクラシー即ち共和政治とは、その国の正史によることで、絶対的に見たる優劣の判定など出来るものではないが、いづれにしてもデモクラシーと云ふ言語は、容易に吾々にわからない。

(3) それから日本の愛国心は、英米のパトリオティズム(patriotism)にあたると云ふのが、通念であろうが、これがまた、英米では全くちがふ。英国の国歌は、ひたむきに英国王に忠誠を誓つて居る。英国人のパトリオティズムは、王に忠誠をいたすことである。無論英国人のパトリオティズムといへども、結局、国を愛することになるにきまつて居るが、それは王を通じて愛することであり、国家は正面に立つて居ない。正面の目標は王そのものである。王を無視して愛国心はあり得ない。愛国心と云ふ画章に点睛するもの、愛国心を鼓舞躍動せしむるものこそ王である。単なる愛国心などは、英国人にはわけのわからぬものであり、死物であろう。英国は数百年にわたつて、外敵に国土を蹂躙せられたことはないが、それでも幾度か敗戦の経験はなめて居る。さう云へば今回の第二次世界大戦に於いても、当初は連敗を喫して居たのであるが、敗戦は英国人にとりては、永遠の登山に於ける一時的のくだり坂くらゐなものであろう。彼等は親の親の親のそのまた親の親の時代から、母のふところにいだかれながら、ゴッド・セイブ・アワーグレシアスキングを聞き、それを絶対の真理として育つて居る。戦争に勝つたら主権在君乃至忠君愛国で、負けたら主権在民乃至単なる愛国心であり、罪を王室に帰するなどと云ふことはあり得ないことである。さやうなことになれと云はれたら、英国人は何としてよいかわからず、狂気乱心のほかないであろう。

英国の国歌をあげたから米国の国歌なる星条旗の歌(The Star-Spangled Banner)もあげねばなら

ぬが、歌の全部をかかげるのはわずらはしい。結句だけをしめすと、「自由の国土に勇士の御に勝利の旗幟よひるがへれ」と云ふので、一八一二―五年大陸封鎖のナポレオンに味方して、米国が英国と戦つた時に、勝利を讃美した歌である。公僕なる大統領など眼中に置くはずなく、直接国家に忠誠を誓つて居るのであるが、この米国的パトリオティズムも今日では、確固不動の根をかためて居る。米国がピユリタンに依つて建国されたことは、今更ら云ふに及ばぬことであるが、ピユリタンでも一六二〇年渡米の船上に於いて、上陸したら英国の王をいたゞき、理想の国を造らんことを誓つて居る。然るに上陸した地は全然処女地であり、従来の主義主張のない土地であつた。しかも本国とは遠隔の地であつた。各国から移民が流入した。かくて平面的の平等の国家が出来、そこで愛国心とは、直接「自由の国土」を愛することになつたのであるが、この愛国心は一七八三年独立戦争に於いて、まづ凱歌を奏した。一八一二―五年またまた英国と戦ひ、首都ワシントンは英軍に占領せられたが、結局戦敗国とはならず引分けに終つた。一八四六―八年、メキシコと戦つてテキサス、ニユー・メキシコ、カルフォルニヤの広大なる地域を奪略した。一八九八年西班牙と戦つてハワイ、フィリッピン、グアムを領有した。フィリッピンには近時独立を許したが、それは所謂ニユー・コロニアル・システムによる愚民政策であつて、独立は有名無実だ。それから第一次世界大戦に参加し、今回の第二次世界大戦に於いて、日本を屈従せしめ、日本を包含して太平洋を全面的に席捲した。かくて錬成に錬成をかさねて、今日の米国の「自由の国土」を愛する愛国心が出来たのであつて、一朝一夕のことではない。然るに近時日本には、米国が国はわかくても愛国心が旺盛であるから、これからの日本も、日本国憲法により、忠君愛国ではなく愛国心でやつて行けると云ふ論者があるが、これは上述の米国の愛国心の正史を知らぬものであると共に、日本には従来忠君愛国があつ

た。愛国心とも云つたことがあるが、それは忠君を省略したものであり、忠君を無視し、忠君と無関係の愛国心などと云ふものはあつたことなかつた。今日の日本の狂気乱心沙汰は、伝統の忠君愛国即ち主権在君と新来の愛国心即ち主権在民との相剋に帰すべきであると云ふことが、理解し得るにいでて居る。

以上私は外国語はその超感性部分に於いて、容易にわかるものでないと云ふことを、二三の実例によつて説明したのであるが、それが同一国人の間に於いては、末梢的部分は兎も角、中心点に於ては、すぐそれと共鳴し得る。それが言語の本質である。（未　完）

（元東大講師
近畿大教授　経済学博士）